

『御嶽由来記』・『雍正旧記』にみえる御嶽の伝承から ——トーテムと王権——

上原 孝三

1、はじめに

伊良部島の牧山の頂上付近にピャージウタキ（比屋地御嶽）がある。宮古の中でも有名な御嶽である。

宮古島市城辺の福里にはイラウ・ピャージウタキ（伊良部・比屋地御嶽）があり、平良方面から福里集落に入る右手前に存在する。この御嶽は伊良部島からの移住者が創設したという。伝承の通り、イビに向かうと拝み手の向きは西である。つまり、伊良部島（比屋地御嶽）を遥拝する形になる。この御嶽は福里在の伊良部島出身 N 家の祖先が創建したものだという（注①）。

宮古島市の池間・佐良浜・西原でもイラウ・ヒャージイ（伊良部・比屋地）と称す。神名はダヤジヌカン（ダヤジヌシイ）あるいはダージヌカン（ダージヌシイ）と発音するが、「畑の神」（畑の主）、つまりユヌカン（世の神。豊穰神）と観念している。

池間・佐良浜・西原にはそれぞれウハルジウタキ（大主御嶽）がある。池間がムトゥジイマ（元島）であり、佐良浜・西原は分村である関係上、佐良浜・西原の大主御嶽は分社（分神）ということになる。大主御嶽は伊良部島宇国仲や宮古島の城辺地方にもみられるが、それぞれ池間島から出た人が創った御嶽だといわれる。

御嶽は人にとって必要なもので、信仰の対象となる。宗教生活のみならず、自らの出自やアイデンティティーなどの精神生活を支える面もあった、ということであろう。

近世期にも御嶽は存在していた。『御嶽由来記』や『雍正旧記』に登場する。本稿では、『御嶽由来記』・『琉球国由来記』（巻 20）・『雍正旧記』にみえる御嶽や御嶽にまつわる伝承から、トーテムと王権について考えてみたい。また、それらに関わる事柄についても考察を加えたい。

2、比屋地御嶽にまつわる伝承—『御嶽由来記』・『琉球国由来記』などから

『御嶽由来記』は、1705 年・1706 年・1707 年の 3 回にわたる資料を基に、宮古から首里王府あてに提出された報告書である。1705 年の報告内容の 1 つに、宮古各地の御嶽とその由

来などが記されている。報告された御嶽の数は25。その打訳は、池間島1、大神島1、宮古島20（離御嶽を含む）、来間島1、伊良部島2である。伊良部島は乗瀬御嶽と比屋地御嶽である。比屋地御嶽の記事を示す（注②）。

比屋地御嶽男神豊見氏親神と唱

諸願に付伊良部五ヶ村崇敬仕候事。

由来往古伊良部村の主豊見氏親と申人力万人に勝れ鬼神をも欺程の勇者にて候。其頃伊良部平良の渡中に大鯖時々浮出往来の船を覆し人命多く横死致底の滓に罷成申候。懼其害売買運送の道絶伊良部の人民甚た苦窮に及び候。氏親被存候はか様に無詮鯖に道を塞かり多くのひとを悩しこそ口惜けり。只我一人の命を捨て万人の愁を助に不如とて竊に日を定天を祈りけるは、我万人の為に今日百年の命を捨申候。此善業には未来永々子孫無窮の盤らせ給ひとて十方を伏拝み先祖重代の刀を抜持て落涙なから宿を立出小舟に乗只一人沖へ乗申候。件の大鯖馳来、舟諸共飲腹海中へ入申候乍被呑腹を立様横様散々割破り候故伊良部平良の渡中の潮は紅の色に罷成候。さしもの大鯖も肝腹被切立気力弱く果候間氏親腹中より割出。其日の晩方比屋地浜に寄揚申候。伊良部人押寄色々養生仕候得共五躰爛臈て死為申由候。泣く泣く比屋地山に葬申候。夫より往来の道を開き、伊良部の人民安堵仕候付、則ち氏親を彼御嶽神と号し、拝み為申由云伝有崇敬仕候事。

上記の記事は、「伊良部村の主豊見氏親」が、「大鯖」(サメ)を退治した内容となっている。人間がサメに飲み込まれたにも関わらず、死なずに刀でサメの腹中をズタズタに突き刺し、サメを退治した奇異な話である。人々の耳目を集めるのは当然であろう。彼の死後遺体を「比屋地山に葬」り、「氏親を彼御嶽神」としたのである。即ち、人を神として祀った。

『琉球国由来記』の比屋地御嶽の事例は、下記のようにになっている（注③）。

比屋地御嶽 男神。豊ミヤ氏親ト唱 伊良部村東方
峰ノ上ニ有。 諸立願ニ付、伊良部村崇敬仕ル事。

由来。往昔、伊良部村ノ主豊見氏親ト云者、力万人ニコヘテ鬼神ヲモ欺程ノ勇者也。其頃、伊良部・平良ノ渡中ニ大鯖時々浮出、往来ノ船ヲ覆シ、人多ク致横死、底ノ滓ニナリニケル。其害殃ヲ恐レ、売買運送ノ海路絶へ、恵良部ノ人民悉ク及苦窮也。氏親試案スルニ、箇様ニ無詮鯖ニ海路ヲ塞レ、多クノ人ヲ悩シケルコソ口惜ケレ。只我一人ノ命ヲ捨テ万人ノ愁ヲ不如助ニトテ、潜ニ日ヲ定メ天ニ祈ケルハ、我、万人ノ為ニ今日百年ノ命ヲ捨ツ。此善業ニハ永々ノ子孫無窮ニ繁荣セサセタマヘトテ、十方ヲ伏拝ミ、先祖

重代ノ刀ヲ抜持テ、落涙ナガラ宿ヲ立出、小舟ニ乗、只一人沖へ乗出ス。件ノ大鯖馳来リ、船諸共ニ呑ニケル。鯖ノ腹中ニ在リナガラ、腹ヲ立様横様散々ニ切破ル。伊良部・平良ノ渡中ノ潮ハ紅ノ色ニ染ナシケル。サシモノ大鯖モ肝腸ヨリ被切立、氣力弱果タリ。氏親、腹中ヨリ割出、其日ノ晩、比屋地浜ニ寄揚ル。恵良部村ノ人民押寄、色々加療治ケレドモ無驗、五躰爛レ、臆而息絶ヘニケル。泣々比屋地山ニ葬置ク。夫ヨリ往来ノ海路開ケ、伊良部ノ人民安堵イタシケル。然レバ氏親ヲ彼御嶽神ト号シ、拜ミ申タルトナリ。

『琉球国由来記』では、比屋地御嶽の所在地を「伊良部村東方峰ノ上ニ有」と明記しているが、『御嶽由来記』にはない。また、『御嶽由来記』では、「諸願ニ付伊良部五ヶ村中崇敬」したとあるが、『琉球国由来記』には「伊良部村崇敬仕ル」とあり、「伊良部村」一村のみとなっている。ちなみに、『御嶽由来記』では「諸願ニ付伊良部五ヶ村中崇敬」したとある。「伊良部五ヶ村」とは、伊良部村・仲地村・国仲村・長浜村・佐和田村の村々（佐良浜村の村建て1727年）のことを指しているだろうと思われる。1705年の段階では伊良部島には、伊良部村と佐和田村の二ヶ村だけがある。仲地村・国仲村・長浜村はまだ村建てされていない。従って、『琉球国由来記』の「伊良部村崇敬仕ル」とあるのが正確である。

文書の表記・表現法の違いはあれ、『御嶽由来記』と『琉球国由来記』の記事内容は基本的には同じで、「豊見氏親」の活躍を語った内容である。「豊見氏親」は伊良部島民の英雄であり、英雄神として崇拝されたのである。「豊見氏親」の話は、『遺老説伝』にもあり、広く人口に膾炙していた。

先述したように、『御嶽由来記』には25の御嶽名とその由来が記されている。25の中で24は宮古在来神である。例外は「船立御嶽」である。『御嶽由来記』に拠れば、久米島から「神世に久米島按司やらん人」に兄妹が追放され、漂流の末宮古島の「平良内船立」にたどりついた。兄妹の死後骨を船立山に埋め神と崇敬した。これが「船立御嶽」の由来の概略である。

1700年当時にも、宮古には数多くの御嶽があった。『雍正旧記』（1727年成立）をみればわかることだ（表I参照）。それにも関わらず、船立御嶽を選択した理由は何だったのか。船立御嶽を外そうと思えばできたはずだった。外す理由は久米島からの「外来者」である。しかし、結果として記載された。その理由は何であろうか。

3、『雍正旧記』にみえる御嶽—首里王とトーテム

不可解なことはもう一つある。『雍正旧記』にも18の御嶽が見えるが、基本的には『御嶽

由来記』に記載されなかった御嶽である。しかし、漲水御嶽・喜佐真御嶽・比屋地御嶽の3つの御嶽が重複している。重複する理由とは何か。

『雍正旧記』御嶽の記載の体裁は『御嶽由来記』（1705）と同様で、原則的に御嶽名・神の性別・神名・御嶽の由来の順である。但し、『御嶽由来記』にあるように「船路の為併に諸願に付」という御嶽で行う祭祀は記載されていない。また、「村中崇敬仕候事」の内容記事も見られない。

「漲水御嶽」は「漲水御嶽蔵元前にあり」とだけあり、「喜佐真御嶽」は、「男神またね若按司と唱」とのみあり、由来は記されてない。つまり、漲水御嶽・喜佐真御嶽に関しては、『雍正旧記』では御嶽の由来は記されてなく、御嶽の名称と神名だけが簡略化されて記述されている。

現在、「漲水御嶽」は宮古第一のそれと考えられている。それは、いつごろからそのように捉えられていたのか。格付けされた宮古の御嶽。宮古の御嶽を語る際に、「漲水御嶽」は外せないとの意識があったのだろう。それならば、「喜佐真御嶽」はどのように説明すればよいのか。

まず、「漲水御嶽」から述べてみたい。『御嶽由来記』に、「漲水御嶽 弁財天女／首里天加那志美御前御為緒船海上安穩の為め諸願に付崇敬仕候事」とある。つまり、「漲水御嶽弁財天女」で祭祀があるごとに「首里天加那志美御前御為」に宮古の最高神職にある大安母などが祈願せねばならなかった。

『琉球国由来記』には、「漲水御嶽 弁財天女／公儀ノ御願・諸船海上安穩ノタメ、諸願ニ崇敬仕ル也」とある。「公儀」という文字は、「漲水御嶽」にしか見えない。「公儀」とは首里王府のことを指す。つまり、「漲水御嶽」は公儀の御嶽であり、八重山でいう「クージオン」（公儀拝み・公儀御嶽）になる。このような理由から、首里王の事を祈る「漲水御嶽」を『雍正旧記』の中から外すわけにはいかなかった。1700年代初頭より宮古の御嶽の中で格が一番上ということになったのである。宮古の御嶽の中で格が一番上というのは、時代的に更に遡るだろう。

文献名と御嶽名（表1）

名	『御嶽由来記』	『御嶽由来記』	『琉球国由来記』	『雍正旧記』	○印は ○とYの重複
年	1705年	1706年	1713年	1727年	
数	25	16	29	18	
1	漲水御嶽	漲水御嶽	漲水御嶽	漲水御嶽	○
2	廣瀬御嶽	船立御嶽	廣瀬御嶽	尻間御嶽	
3	大城御嶽	廣瀬御嶽	大城御嶽	外間御嶽	

4	中間御嶽	野猿間御嶽	中間御嶽	喜佐真御嶽	○
5	新城御嶽	島尻御嶽	新城御嶽	目利真御嶽	
6	池間御嶽	大御神御嶽	池間御嶽	大山御嶽	
7	野猿間御嶽	大城御嶽	野猿間御嶽	前屋御嶽	
8	島尻御嶽	中間御嶽	島尻御嶽	上比屋御嶽	
9	大御神御嶽	新城御嶽	大御神御嶽	平屋久御嶽	
10	船立御嶽	池間御嶽	船立御嶽	大浦御嶽	
11	離御嶽	山立御嶽	離御嶽	長山御嶽	
12	山立御嶽	高津間御嶽	山立御嶽	石泊御嶽	
13	池ノ御嶽	嶺間御嶽	池ノ御嶽	比屋地御嶽	○
14	高津間御嶽	離御嶽	高津間御嶽	嵩平御嶽	
15	嶺間御嶽	浦底御嶽	峰間御嶽	運城御嶽	△
16	浦底御嶽	池ノ御嶽	浦底御嶽	泊御嶽	△
17	赤崎御嶽		赤崎御嶽	塩川御嶽	
18	西新崎御嶽		西新崎御嶽	水納御嶽	
19	大泊御嶽		大泊御嶽		
20	川嶺御嶽		川峰御嶽		
21	真玉御嶽		真玉御嶽		
22	石城御嶽		石城御嶽		
23	喜佐真御嶽		喜佐真御嶽		
24	乗瀬御嶽		乗瀬御嶽		
25	比屋地御嶽		比屋地御嶽		
26			運城御嶽	△	
27			泊御嶽	△	
28			ガワラ瀬御嶽		
29			城花持御嶽		
30					

『御嶽由来記』 ○とする (1705年)

※△はRとYが重複

『琉球国由来記』 Rとする

『雍正旧記』 Yとする

では、「喜佐真御嶽」の場合はどうなのか。『御嶽由来記』（1705年）では、「喜佐真御嶽男神真種子若按司と唱」と御嶽・神名を記し、「（前略—引用者）此玉を仲宗根豊見親へ参らせ候処おきやかもい加那志御守に奉願上候」とある。このことは王府の側にも資料がある。「国王頌徳碑（石門之東之碑文）」（嘉靖元年壬午十二月吉日）には次のようにある。

首里おきやかもいかなしの御代にみやこより冶金丸ミこしミ玉のわたり申候時にたて申候ひのもの

「真種子若按司」の母である天女が、「玉」を持って川満村に降臨した。その「玉」が「真種子若按司」から川満大殿に譲られ、川満大殿から「仲宗根豊見親」に献上された。さらに、「仲宗根豊見親」から「おきやかもい」（尚真王）に献上されたのである。

尚真王は、『御嶽由来記』が編纂される約 200 年前の首里王で、第二尚氏の黄金期を形成した王である。「喜佐真御嶽」が『雍正旧記』に見えるのは「おきやかもい加那志」（首里王）の存在それ故だったのである。

「漲水御嶽」「喜佐真御嶽」は明らかに首里王の権威を意識し、首里王の威光に対し忠誠・服従、自粛あるいは付度の気持ちが働いたのであろう。つまり、首里王の王権を強く意識したといえる。

王権というものは、中央と地方あるいは「中心と周縁」とう関係の問題、王権がその外側にあるものを取り込んでいくという構造を見ることができる。王権は、王権外を包みこみ、回収していく 1 つの大きな世界をつくっている。

さて、「喜佐真御嶽」の場合とは異なり、比屋地御嶽についての由来などは、『雍正旧記』には簡略化されずに記されてある（注④）。首里王の王権とは違うレベルにある。これは明らかに「漲水御嶽」・「喜佐真御嶽」とは異なる理由が存在する。『雍正旧記』の「比屋地御嶽」には、

比屋地御嶽男神あからともかねと唱

右由来は昔神代に久米島より御神兄弟渡海にて弟神は比屋地御嶽の神となり兄神は八重山島おもと嶽の神となりたるよし候。右神御縁を以八重山宮古前代より為致通融由候事。

とある。上記の内容は明らかに『御嶽由来記』のそれとは異なる。祭神・由来内容が違うのである。『雍正旧記』を編纂する以前に、『御嶽由来記』の比屋地御嶽の男祭神・由来内容が違うことに気づいた宮古の役人が重複する形になるが敢えて記述した、と考えられる。また、『雍正旧記』では、「比屋地御嶽」のすぐ後に「豊見氏親伊良部平良の渡中にて大鯖切殺候事」の記事項目がある。

右由来は昔伊良部村の主豊見氏親と申もの力万人に勝れ、大勇者にて候。其頃伊良部平良の渡中に大鱧時々往来の船を覆し、人を喰ひ渡海難成候付甚た及困窮候。氏親被存候は、何とそ此鱧を切殺万人の愁を除き可申と日を定め、比屋地御嶽に誓願仕只独り小舟に乗り沖に漕出候処、件の大鯖馳参り船諸共に可呑躰候。氏親老尺程の刀を持、

海に飛入候間、大鱧一口に吞入候。氏親鯖腹中に入、鱧の腸切破り腹中より割出候得共、不相保懸て相果申候間、則ち比屋地山の側に葬置御嶽の神同前に中古迄祭候事。

上記の記事によれば、「氏親」は「鯖」（「鱧」ともある）を退治に行く前に「比屋地御嶽に誓願」し、死後は「比屋地山の側に葬置」いたという。つまり、「氏親」が活着しているときから比屋地御嶽は存在し、「比屋地山の側」には「氏親」の死後「葬置」いた墓所がある。現在でも比屋地御嶽と「氏親」の墓所は別々の場所にあるので、『雍正旧記』の記事内容は正しいことになる。

「氏親」を祖とする「伊安氏系図家譜正統」の「家譜序」（注⑤）に次の文言がある。「氏親」が「大魚」を退治して後のことである。

子衆人皆涕泣而葬于比屋地嶽之側也到于今號氏親之墓所並称比屋地嶽諸人崇敬之也

上記の記事に拠れば、墓所と比屋地御嶽の場所は別々とあり、『雍正旧記』の内容を裏付けている。しかし注意すべきは、この「家譜序」には「氏親」を飲み込んだのは「大魚」とあり、「鱧」「鯖」とは記してない。

「比屋地御嶽」のすぐ後に、「豊見氏親伊良部平良の渡中にて大鯖切殺候事」の記事項目があるが、これは意図的に並べられたものである。この並び方で、「比屋地御嶽男神あからともかね」の方が時代的に古い内容であることが分かり、報告文書の手続き上でも問題はなしで、記述は正当だといえる。しかし、この訂正は、『雍正旧記』を報告するために調査・検討した結果偶々発見された偶発的なものではない、と考えられる。

「比屋地御嶽男神あからともかね」の方が時代的に古い内容であるならば、1705年の段階で『御嶽由来記』に掲載されてしかるべきであった。そうすると、「比屋地御嶽男神豊見氏親神」と「比屋地御嶽男神あからともかね」の2つの話は伊良部島で民間伝承として語られていたにもかかわらず、1705年作成の『御嶽由来記』に「比屋地御嶽男神あからともかね」は御嶽伝承として採用されず、「比屋地御嶽男神豊見氏親神」がなぜ選択・採用されたか、ということに疑問が残る。

ところで、『御嶽由来記』（1707年の報告）の最後の部分に次のことが記載されている。

同四十四年より／右御用に付島中年寄の人々悉皆相会會各聞伝候古語申出以熟談致用捨相究め如斯御座候以上／大清康熙四拾六丁亥六月朔日 諸役人／右西戌亥歳迄琉球差上置候間跡々見合の為め如此御座候以上

首里王府の御用につき、宮古島中（池間島・大神島・伊良部島・来間島も含める）の老人に会い、各老人が聞き伝える「古語」（古伝承であろう）をよくよく相談し考え、伝承資料の取捨選択を行った。首里王府へ「酉戌亥」の資料を「差上」たが、後々「見合」の為、このように残した、というのが大意である。「島中年寄の人々」というのは士族や庶民の老人たちということであろう。

宮古の役人は「酉戌亥」の数ヶ年で得た首里王府への報告資料を、「跡々見合の為め」記録・保存した。いわゆる格護本を残したということである。だが、保存・保管したのは格護本だけであろうか。数年間で集めた資料はどうなるのか。「跡々見合の為め」とあるので、首里王府へ報告した以外の資料も残したであろう。そうしなければ後日、説明がつかず困ることが生じる、とも考えたからであろう。

つまり、比屋地御嶽に関する伝承は、『雍正旧記』を報告するために新たに採集したとも考えられるが、「酉戌亥」の数ヶ年で得た資料として保管されていたものを活用したかもしれない。無論「跡々見合」た結果、1727年の段階で比屋地御嶽については訂正できたということも考えられる。

「比屋地御嶽男神豊見氏親神」が、『御嶽由来記』（1705年報告）に記載されたが、そのことについて、快く思わない一門がいたと思われる。忠導氏一門である。忠導氏一門は『球陽』（1745年）では、「鯖祖氏」とある。

『雍正旧記』には、「仲宗根豊見親末孫鯖不喰候事」の項目で、「仲宗根豊見親」の外戚方の先祖「かはにや」と忠導氏の開祖「仲宗根豊見親」が「鯖」に助けられたという記事が掲載されている。

右由来上古西銘村にかはにやと申盲罷居候。其子男子三人女子二人有之。男子三人は悪逆非道の者にて父の盲を耻父を可失企にて或時海へ列参。父を城赤と申干瀬に下し、子供三人は漁の躰に遁走帰宅致し候。（中略—引用者）啼叫候処大鯖身の膚に障り候間、是れ溺死も鯖に喰はりて死るも同事と存先鯖の背に打乗申候処、天の御加護にても候哉白川浜へ着危命を助き申候。（中略—引用者）

このかはにやは、仲宗根豊見や外戚方の先祖にて候。この由来を以、其末孫鱻を氏神と慎喰不申候処、又其後、仲宗根豊見親八重山島の内たんだ干瀬と申所に船致破損万死一生の涯鯖の助に逢へ助命致し、氏神の加護右の通節々有之。故今に至しも其慎不怠候事。

「鯖」・「鱻」はサメを意味し、宮古方言では「サバ」([saba])と発音する。海中（城赤と

申干瀬)に取り残された「かはにや」は、突然現れた「鯖」の背に乗り白川浜にたどり着き一命を取りとめた。その代償・お礼として牛を屠り「鯖」に与えた。

「仲宗根豊見親」も八重山の「たんだ干瀬」で水難事故に遭遇するが、「鯖」に命を助けられる。『琉球国由来記』では、「カバニヤ」は末孫に至るまでサバを食べることを禁じる、という遺言を残した、と記している。それ故、「かはにや」以来これまで「末孫鱻を氏神と慎んで食しない。「鯖祖氏」と称される所以である。

「鯖」・「鱻」は、仲宗根家(忠導氏一門)にとって特別の関係にあり、崇拝する魚(動物)なのである。つまり、トーテムとしてのサバである。サバをトーテムとして敬う忠導氏一門に、「比屋地御嶽男神豊見氏親神」の話は自らのトーテムを侮辱・否定されたような不愉快な話であったろう。『雍正旧記』は忠導氏一門にとって、「比屋地御嶽男神豊見氏親神」伝承を是正し書き直す絶好の機会であったに違いない。「仲宗根豊見親末孫鯖不喰候事」の項目記事がそれを証明している。

「かはにや」と「仲宗根豊見親」の伝承は、『琉球国由来記』では「中宗根豊ミヤ物語之事」として記されており、かなりの分量を要している。『琉球国由来記』の元資料となる『御嶽由来記』には「中宗根豊ミヤ物語之事」はない。これも後日、宮古より首里王府へ報告されたのであろうか。

4、『琉球国由来記』と『雍正旧記』にみえる多良間島・水納島の御嶽

『御嶽由来記』にみえる御嶽での不可解な点がもう1つある。多良間島・水納島の御嶽についてである。

そもそも、『御嶽由来記』(1705年報告)には25の御嶽がある。1706年報告の御嶽の数は16だが、それは1705年報告から抽出されたそれで、「御嶽16」といわれている。1705年の報告は『琉球国由来記』(1713年成立。宮古は巻20)に、1706年のそれは『女官御双紙』にそれぞれ反映されている。

1705年報告の御嶽の所在地は、宮古島・大神島・池間島・伊良部島である。宮古の中で多良間島・水納島の御嶽が含まれていないので、それを補ったのであろう。『琉球国由来記』には多良間島の御嶽が3つ水納島の御嶽が1つ、都合4つの御嶽が報告されたので全部で29の御嶽数になっている。

『御嶽由来記』から8年後に『琉球国由来記』は成立した。8年の間に4つの御嶽を報告するのは難しいことではない。しかし、どのような手続きを経て、どのような形式で報告されたのか、宮古側に記録が残されていないので、詳細については不明なままである。

『琉球国由来記』に報告された多良間島・水納島の御嶽は以下の通りである。「運城御嶽」（6柱の神名有り。以下、神名は省略する）、「泊御嶽」（2柱）、「ガワラセ御嶽」（2柱）。水納島の御嶽は、「城花餅御嶽」（2柱）。これらの四つの御嶽は、『雍正旧記』にもみえる。

しかし、『雍正旧記』では「運城御嶽」（1柱）、「泊御嶽」（1柱）、「塩川御嶽」（1柱）、「水納御嶽」（1柱）となっている。ガワラセ御嶽が塩川御嶽、城花餅御嶽が水納御嶽と名称が変わっており、神柱の数も異なる。多良間の御嶽の神名は1柱だが、『琉球国由来記』にある神名と重なるが、水納御嶽は『琉球国由来記』の2柱とは異なる神名である。

先述したように、『御嶽由来記』と『雍正旧記』に見える漲水御嶽・喜佐真御嶽・比屋地御嶽の三つの御嶽について重複している理由については論述したが、ここでの重複は『琉球国由来記』と『雍正旧記』であるので、自ずと事情が異なる。

『雍正旧記』は先行報告である『御嶽由来記』を参考に作成した。御嶽については、『雍正旧記』の記載の体裁は、『御嶽由来記』に準じた。「運城御嶽」「泊御嶽」「塩川御嶽」「城花餅御嶽」は、「尻間御嶽」「外間御嶽」のように原則通り、御嶽名・神の性別・神名・御嶽の由来の順である。つまり、これら4つの御嶽は首里王府への初出報告のそれと考えていた。もし、見ているのであれば首里王と無関係な多良間島・水納島の御嶽は記載しなかったはずである。「中宗根豊ミヤ物語之事」も同様なことがいえる。『琉球国由来記』（巻20）の基となった格護本を宮古の役人は見ていないということであろうか。

5、記憶の伝承—歌謡と首里王

1500年、琉球国王・尚真王は八重山の「オヤケアカハチ・ホンガワラ」討伐の為、大小の船舶46隻、兵3千人を派遣した。その際、宮古の仲宗根豊見親は王の命を受け、官軍の先導役として討伐軍に加わり平定に助力した。その後、豊見親は与那国に軍勢を派遣したが、当地を平定することができなかつたので引き返した。与那国の酋長鬼虎は、王府に従わなかつたので、国王から再度仲宗根豊見親に平定の命が発令され、1522年に鬼虎征伐がなされた（注⑥）。その前後のいきさつを、「同人八重山入りの時のあやご」は語っている。「同人」とは仲宗根豊見親のことである。この「あやご」には、仲宗根豊見親の呼びかけに応じ、戦闘に参加した宮古各地の「手まさりや 手となめや」（手勝る者 手鳴響く者）たちの名前が次々に登場する。

仲宗根家本『雍正旧記』には、10種の歌謡が記載されている。他の諸本に比較して、5首多い。この5首の歌謡は他の諸本には見えないので、この点が仲宗根家本の大きな特徴といえる。仲宗根家本『雍正旧記』の成立は不明だが、1727年以降だろう。

「同人八重山入りの時のあやこ」は、仲宗根家本『雍正旧記』にしか見えない。「仲宗根家本」に収載されている歌謡は、「弘治年間の頃同人島の主成候付あやこ」「同人定納相調初而琉球へ差上候時あやこ」「同人八重山入りの時のあやこ」「同人八重山入之時嫡子仲屋の金盛豊見親捕参り候女のあやこ但鬼虎か娘」「同人島の主に成り神水に諸村へ罷通候砌下地村之内かな浜と申潟より平良村之往還仕諸人難儀之儀の躰見及候付神水の後加那浜橋積為申由候其時のあやこ」の5首である。この5首は田島本などの他の諸本にはみえない。

また、同歌は現在旋律を伴った歌としても伝承されていない。つまり、「同人八重山入りの時のあやこ」は仲宗根一門が伝承した歌謡といえるが、いつ・どこで・誰がどのような演唱法で歌ったのかはわからない。また、時代は不明だが、ある時期から文字で伝承されていることになる。記憶から記録への変化となる。

「同人八重山入りの時のあやこ」(注⑦)は、歴史的事実を読み込んだ歌謡である。叙事的な歌謡であるので、「史歌」ともいわれる。

同人八重山入りの時のあやこ

1 空広が豊見親のあやことそ	空広の豊見親のアヤゴをばしよう
2 おきなから美御前から美御声	沖縄から国王からの美御声で
3 空広よ宮古となめてやまれわ	空広よ 宮古を鎮めておられるので
4 豊見親を島となめてやまれは	豊見親よ 島を鎮めておられるので
5 我宮古む大宮古むさかやん	わが宮古も大宮古も栄えん
6 大八重山の下八重山の人よ	大八重山の下八重山の人を
7 返せ見ま戻せ見まてりいは	返してみろ戻してみろといえば
8 返されの戻されのねた(さ)から	返されの戻されのできない残念さは
9 十百その十百さの中から	十百人<千>人の十百人の中から
10 手まさりやは手となめやは撰	手勝る者は手鳴響く者を選び
11 大平良大むかねからやた	大平良大御宗根<部落>から
12 中屋かね兄の金盛とよ	仲屋金兄の金盛と
13 堀川里こむり里ならとよ	堀川里小堀里のならと
14 上ひ屋里東里ならとよ	上比屋里東里ならと
15 大川盛与那覇むらたらとよ	大川盛与那覇邑の太良と
16 崎原の西崎のかあらもや	崎原の西崎のカーラ<首長>も
17 すみや大つゝの主つかさと	住屋の大頂の主司と

- | | | |
|-----|------------------|-----------------|
| 1 8 | あれや生りほこりとの大ほちと | あれや生まれ誇り殿大祖父と |
| 1 9 | 金志川の豊見親金盛とよ | 金志川の豊見親金盛と |
| 2 0 | 城なき弟なきたつとよ | 城あたり<金盛の>弟ナキタツと |
| 2 1 | 砂川あほかめつゝの主とよ | 砂川アフガマ頂の主と |
| 2 2 | 下地生れもてやにきやもらとよ | 下地生まれモテヤニキヤ盛と |
| 2 3 | 川根のまんいりのまんきやりとよ | 川根のマンイリのマンキヤリと |
| 2 4 | 来間生りわりみやのとのとよ | 来間生まれワリミヤの殿と |
| 2 5 | 野崎生れ赤宇立親とよ | 野崎生れ赤宇立親と |
| 2 6 | 伊良部生れ国仲のままとよ | 伊良部生まれ国仲のママラと |
| 2 7 | よかい生れやひちのおまのこことよ | 良き生まれ比屋地のオマノコと |
| 2 8 | 神まさりやいはんのおもとよ | 神勝る者伊安登之於母婦人と |
| 2 9 | 池間生れ上ましのけさとよ | 池間生まれの上榊のケサと |
| 3 0 | はなれ生れ尻の座のすんとよ | 離島生まれ 尻の座のスント |
| 3 1 | 磯はなのほけ嶺のまんきやと | 磯の上の禿げ嶺のマンキヤと |
| 3 2 | かりまたのみなこ地のごもりやと | 狩俣のミナグ地のザモリヤと |
| 3 3 | かね屋大つゝの主つかさと | 兼屋大頂の主司と |
| 3 4 | 大神生り豊見かねせとらと | 大神生まれの豊見金セトラと |
| 3 5 | 土原の内原のおそろと | 土原の内原のオソロと |
| 3 6 | いくさはなほあらはなよいらへ | 戦端 戦争端を選び |
| 3 7 | 大八重山下八重山へやれいけは | 大八重山に下八重山に走り行けば |
| 3 8 | いくさみやをほあらみやをすせはと | 戦庭をほあら庭をすれば |
| 3 9 | あけず舞をはへら舞をさをとれ | 蜻蛉の舞を蝶舞をさあ踊れ |
| 4 0 | 前手んな百さるきたうせは | 前手（先鋒）には百刺し倒せば |
| 4 1 | 尻手んな百かなきたうせは | 尻手（後方）には百の難ぎ倒せば |
| 4 2 | 与那国の島方へありけいは | 与那国の島の方に走り行けば |
| 4 3 | 与那国のいきはての鬼とら | 与那国の行き果ての鬼虎は |
| 4 4 | いき向ひへひ向ひ立とれ | 行き向かい走り向かい立っていて |
| 4 5 | 空広が足なけいみやはて | 空広が足を投げ出して |
| 4 6 | 豊見親のひさなけいみやはて | 豊見親が膝を投げ出して |
| 4 7 | 返す見と戻す見と豊まめ | 返してみろ戻してみろ豊見親め |
| 4 8 | あんやはおわやは鬼とら | そうならばこうなれば鬼虎よ |
| 4 9 | 我刀冶金丸請見り | わが刀冶金丸を受けてみろ |

- | | | |
|----|---------------|-----------------|
| 50 | 声掛は言とのいはにふさせ | 声掛けは言葉掛けは遅しと |
| 51 | 鬼とらを芋ふきたけたうすわ | 鬼虎を芋ふきのように倒すと |
| 52 | おんつよく島鎮豊たれ | 武運強く島は鎮まり鳴響んだのだ |

さて、ここでは歌の内容ではなく、「同人八重山入りの時のあやこ」に記載された宮古各地の「手まさりや手となめや」（手勝る者手鳴響く者）たちに注目したい。12節から35節が「手まさりや手となめや」である。地域と人数を歌に登場する順にならべたい。

まず、平良地方からは7人。城辺地方3人、下地地方2人、来間島1人、野崎1人、伊良部島3人、池間島2人、狩俣3人、大神島1人、多良間島1人である。男女の内訳は、男20人、女4人。4人の女性は司（ツカサ）達である。つまり、都合24人の男女がみえる（注⑧）。しかし、「同人八重山入りの時のあやこ」の冒頭部分には「空広か豊見親のあやことそ」とあるので、仲宗根豊見親を加えると25人になる。

25という数は、『御嶽由来記』の御嶽の数25を想起させる。この数の一致は決して偶然ではあるまい。八重山入りに参加した人名・村名の榮譽を称え、歌に残した。そればかりではなく、人名・村名を後世に伝える手段として御嶽に反映させたものと思われる。

例えば、狩俣村の参加人数は3人なので、御嶽は3。大神島・来間島は、参加者は各1人なので、御嶽も各1つずつになっている。

だが、野崎村（松原村）の参加人数は1人なのに、御嶽の数は2つとなっていて、参加人数と御嶽数が対応していない例もある。また、西仲宗根村（廣瀬御嶽）、島尻村（野猿間御嶽・島尻御嶽）などのように、八重山入りに参加しなくとも記載されている村・御嶽もある。逆に、八重山入りに参加しても多良間島のように、村・御嶽が記載されていない例もある。このことは、『御嶽由来記』の御嶽の選択・採用基準がいくつかあることを示唆する。

廣瀬御嶽・船立御嶽の両御嶽は、沖縄と関係する御嶽である。廣瀬御嶽は、初めて沖縄の中山に入貢した与那覇勢頭豊見親と密接に関わる御嶽である。与那覇勢頭豊見親の末裔は、白川氏であり宮古でも名門であるので、廣瀬御嶽を外すわけにはいかなかったのであろう。与那覇勢頭豊見親が中山入貢の際に、沖縄へのパイロット役として先導したのが、久米島から渡来し、比屋地御嶽に祀られる「アカラトモカネ」だったとの伝承がある。いずれにせよ、廣瀬御嶽・船立御嶽の選択は、沖縄（首里王）を強く意識した故の選択であろう。

ともあれ、『御嶽由来記』に記載された村の選択基準は、八重山入りに参加した人物の出身の村であること。また、沖縄と何らかの関連があるということである。その他にも基準があったらうと思われるが、上記の2点が基軸になっているのは間違いなからう（表2参照）。

次に引用する「四島の親橋積あやこ」（注⑨）は、宮古の歌謡の中でも特異である。「四島

の親」は、「ユシイマヌシュー」（四島の主）・ニーマヌシュー（根間の主）ともいわれ、大神・池間・狩俣・島尻の4ヶ村を統括した狩俣出身の為政者である。八重山入りの際、仲宗根豊見親から宮古の守護役を仰せつかった、といわれる。

四島の親橋積あやこ

- | | |
|--|---|
| 一、首里天の 美御ほけ
玉天の 美御ほけ
おやけめすあかり | 首里天<国王>の お蔭で
玉天<国王>の お蔭で
富貴になり上がり<囃子> |
| 一、狩俣の 親なれ
島尻原 主なれ
おやけめすあかり | 狩俣の 親になり
島尻村の 主になり
富貴になり上がり |
| 一、大神かめ かけそへ
池間かめ かけそへ
おやけめすあかり | 大神まで 支配して
池間まで 支配して
富貴になり上がり |
| 一、あんせそや むすてから
四原てやん そえてから
おやけめすあかり | そうしてから 統治してから
四村までも 添えて
富貴になり上がり |
| 一、渡地は 積あけ
瀬は 積あけ
おやけめすあかり | 渡地を 積み上げ
瀬（石）を 積み上げ
富貴になり上がり |
| 一、積上 はらいからや
きよ（ら）い わちいからや
おやけめすあかり | 積み上げて 祓ってからは
清く 給いてからは
富貴になり上がり |
| 一、上や 上ほこり
島や 島ほこり
おやけめすあかり | 上は 上で誇り
島は 島で誇り
富貴になり上がり |

この歌は、7節からなる。島尻と狩俣を結ぶ橋の完成後に創作された。橋の名を「バタラジィ」（渡瀬）という。

各節で繰り返される「おやけめすあかり」は、囃子となる。「四島の親橋積あやこ」が宮古の歌謡の中でも特異であるとするのは、1節目に「首里天の 美御ほけ／玉天の 美御ほけ」

にみえる歌詞（対句部）故である。この詞章は、宮古の歌謡の中では唯一この歌だけにみえる。宮古の架橋建設であるいわば公共工事に、首里王がなぜ読み込まれるのか。その理由は不明であるが、この歌もまた首里王（王権）を意識しているといえる。中心としての首里王の権力に向かっているのである。

さて、『御嶽由来記』と『雍正旧記』を比較してみると、ある不可解な現象に気づく（表Ⅱ参照）。『雍正旧記』の「下地之内」の「上地村」（西方）・「洲鎌村」（東方）と「城辺之内」「宮国村」と「新里村」の御嶽名が記されていないことである。『御嶽由来記』にはその四ヶ村の名さへ記されていない。四ヶ村の名は、『慶長検地帳』（1611年）にはみえる。

「上地村」・「洲鎌村」の村落の発生・成立は不明なので明言は避けたいが、宮国・新里は古い村落といわれている。考古学では宮国元島は、13世紀後半から15、6世紀にかけて形成されたものとみなされている。従って、宮国村が『御嶽由来記』の中に見えないのが不思議な現象なのである。

村名・御嶽名・歌謡の比較（表2）

『雍正旧記』 1727年										同人八重山入りの時あやこ	
『御嶽由来記』										『雍正旧記』	
間切名	村の位置	村名	島の名称	御嶽名	御嶽名	御嶽名	御嶽名	備考	参加人の有無	登場人物順序	地域
1	平良四ヶ村	南方	下里村	宮古島	漲水御嶽	船立御嶽			○	中屋かね	大平良(7人)
2		西方	西仲宗根村	宮古島	尻間御嶽	廣瀬御嶽			○	堀川里	
3		東方	東仲宗根村	宮古島	外間御嶽				○	上比屋里	
4		北方	荷川取村	宮古島	真玉御嶽				○	大川盛	
5	野崎二ヶ村	東方	松原村	宮古島	川嶺御嶽				○	崎原	
6		西方	久具村	宮古島	大泊御嶽					すみや(ツカサ)	
7	下地之内		川満村	宮古島	喜佐真御嶽	目利真御嶽			○	あれや	
8	下地之内	西方	上地村	宮古島				1611年には有り		↓	
9		東方	洲鎌村	宮古島				1611年には有り		金志川	城辺(3人)
10	下地之内		与那覇村	宮古島	池ノ御嶽	赤崎御嶽	石城御嶽		○	城なぎ	
11	下地之内		嘉手苅村	宮古島	大山御嶽			1714年新村村建て		砂川(ツカサ)	
12	城辺之内		宮国村	宮古島				1611年には有り		↓	
13	城辺之内	西方	新里村	宮古島				1611年には有り		下地	下地(2人)
14		真中	砂川村	宮古島	前屋御嶽	上比屋御嶽			○	川根	
15		東方	友利村	宮古島	山立御嶽	高津間御嶽	嶺間御嶽		○	来間	来間島(1人)
16	城辺之内		俣良村	宮古島	薩御嶽			1716年新村村建て		↓	
17			平安名村	宮古島	浦底御嶽					野崎	野崎(1人)
18			野原村	宮古島	平屋久御嶽			1716年新村村建て		↓	
19			長間村	宮古島				1725年新村村建て		伊良部	伊良部島(3人)
20			大浦村	宮古島	大浦御嶽			1716年新村村建て		よかい	
21			島尻村	宮古島	野猿間御嶽	島尻御嶽				神まさりや(ツカサ)	
22			狩俣村	宮古島	大城御嶽	中間御嶽	新城御嶽		○	↓	
23			大神村	大神島	大神御嶽				○	池間	池間島(2人)
24			池間村	池間島	池間御嶽				○	はなれ	
25			伊良部村	伊良部島	比屋地御嶽	兼瀬御嶽	長山御嶽	石泊御嶽		↓	
26			佐和田村	伊良部島	高平御嶽			1686年新村村建て		磯ばな	狩俣(3人)
27			来間村	来間島	西新崎御嶽				○	かりまた	
28	多良間島	西方	仲筋村	多良間島	運城御嶽	泊御嶽			○	かね屋(ツカサ)	
29	二ヶ村	東方	塩川村	多良間島	塩川御嶽					↓	
30			水納村	水納島	水納御嶽					大神	大神島(1人)
										↓	
										土原	多良間島(1人)
										男	20人参加
										ツカサ	4人参加
										計	24人

さらに言えば、『御嶽由来記』（1705年の報告）の末尾には、「昔いなほかとて毎年九月の内乙卯末日諸村三日物忌仕候由来昔物語之事」とあり、シナフカ祭の起源と祭祀内容を記述し

ており、その中には宮国村の「根所しかほや」とシカプヤ御嶽の名が記されている。つまり、1705年の段階で役人は、シカプヤ御嶽の存在を知っていたのである。にも関わらず、『雍正旧記』に宮国・新里の村名と御嶽名を明記しなかったのは、「八重山入り」に村から人を出さなかった（出なかった）からであろう。繰り返すことになるが、『御嶽由来記』に村名・御嶽名がみえるのは、「八重山入り」の時にその村から人が出たか出なかったか（「八重山入り」に協力したか否か）が選択の一つの基軸になろう。歴史的事実として、何らかの形でスケープゴートを作り出すことで、仲宗根豊見親一門は自己の流儀の正当化を果たした。正当化のメカニズムは政治的力関係に他ならない。

「八重山入り」から200年後、宮古側は首里王府の支配関係の中で政治・経済を考えた。200年経過しても、宮国・新里の御嶽が記載されなかったのは「八重山入り」の際に協力しなかった事情がまだ続いていたのであろう。首里王府への宮古側の村度（考慮）のがあったかも知れないが、王権の持つ威力がそうさせたのかもしれない。

『御嶽由来記』・『雍正旧記』は、宮古と首里王府の関係に力を注ぎ、悪戦苦闘した報告書に外ならない、と指摘できようか。

6、最後に

尚真王による中央集権化と国土統一の最中の1500年。宮古の首長仲宗根豊見親は首里の王府軍と連合することによって、宮古と八重山を制覇することができた。仲宗根豊見親は、更に勢力を増して、1522年「精兵二十四人」を伴い与那国まで進攻し、鬼虎を倒した。

仲宗根豊見親は、1522年以宝刀冶金丸と宝玉を尚真王に献上し、国王に対する忠誠心を示した。その後、約1世紀にわたり仲宗根豊見親一族は、首里王府から八重山地方統治にあたることを任ぜられた。一種の植民地化である。当然のことながら、いろいろな確執が生じたことは歴史が語るところである。

ところで、『雍正旧記』に「平良四ヶ村旧式」として「世乞神」の記事がある。

右由来、十月十一月十二月三ヶ月庚日より月に五日苑出て、毎年三度苑神事有之たる由候。様子は、上々之御為、島中人民之為、五穀満作、船路之為を祈り神事由候。神人数は、無食にて願為申由候。尤、諸村にも右神事為有之由候得共、不相替候故、諸村々に記不申候。右之神事中古迄有之候事。

「世乞神」とは、ウヤガン祭のことである。「世乞神」の目的は、「上々之御為、島中人民

之為、五穀満作、船路之為」である。「上々之御為」とは首里王の為の願い。王権への追従ともうかがえる。

王権は、歌謡のみならず、不可視的世界である精神的世界を支配しようとする意志を持っているようだ。

【注】

注① 1995年9月の現地調査に拠る。情報提供者は、荷川取浩（昭和29年生）。

注② 『平良市史』第三巻 資料編1 前近代 平良市史編さん委員会 1980年。尚、引用に際し句読点を施した。

比嘉実は「崇りなすものの南島の形象—鱻伝説にみる南島の思想—」（『古琉球の思想』所収 三一書房 1982年）の論文で、忠導氏と鱻の関係を述べている。比嘉は宮古のみならず、南島という広い視点から論を展開しているが、「海に生きる人々にとって、最も崇りなすものの象徴的存在である鱻に対して、崇りなすものとして形象することをせずに、逆に漂流、遭難した人間を救う守護神として想像するのが、鱻説話の基本的思想であった」と主張している。

注③ 『定本 琉球国由来記』 外間守善・波照間永吉編著 角川書店 2007年。

注④ 注②に同じ。

注⑤ 『平良市史』第八巻 資料編6（考古・人物・補遺） 平良市史編さん委員会 1988年。

注⑥ 「八重山入り」については、1回説と2回説があるが、本稿では2回説に従った。

注⑦ 『南島歌謡大成 III宮古篇』外間守善・新里幸昭 角川書店 1977年。歌には仮に一連番号を付した。訳を改めた部分もある。

注⑧ 「忠導氏系図家譜正統」（乾隆二十二年）に、「精兵二十四人其外美女四人」とあり、「同人八重山入りのあやこ」と「家譜」とでは人数が異なっている。「家譜」には宮古各地の「手まさりや」を記していないが、「同人八重山入りのあやこ」は「家譜」を書く上で参考になったと思われる。

また、同じ記事の末尾に、「於此捕鬼虎之女子帰島云云當島綾語存干今」とある。この「綾語存干今」は、その当時謡われていたことを意味し、「綾語」のタイトルは「同人八重山入之時嫡子仲屋の金盛豊見親捕参り候女のあやこ但鬼虎か娘」であろう。

「鬼虎か娘」のアーグの歌い手は現在いるのであろうか。筆者は、1982年当時平良市富名腰在住の喜久川メガさん（故人）にお会いし、謡ってもらった。

注⑨ 注⑦に同じ。

